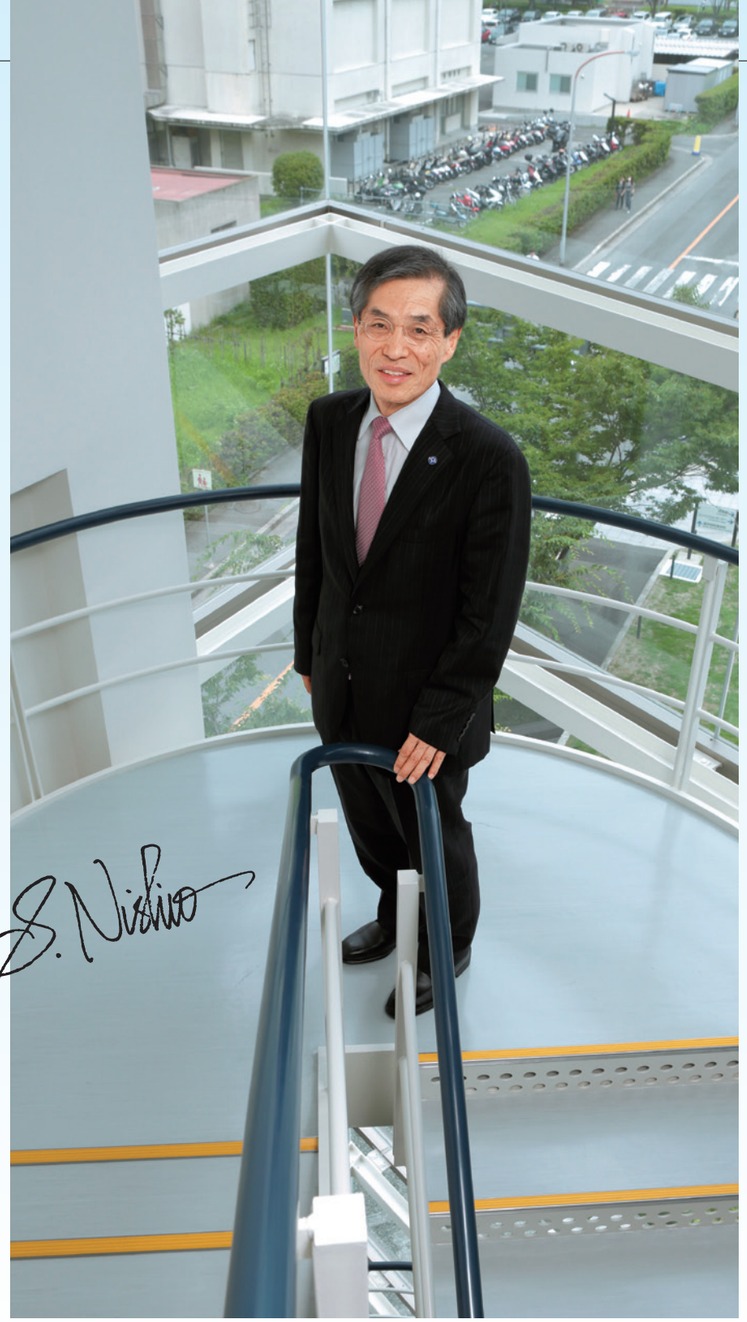
新総長インタビュー
Interview of the new president

第18代総長 西尾章治郎
「知の協奏と共創」で イノベーションを

◉「対話」を重視　大阪大学の多様な知を世界に発信



大阪大学の第18代総長に、理事・副学長をはじめ、情報科学研究科長、サイバーメディアセンター長を務めた西尾章治郎教授が就任した。任期は2015年8月26日から6年間。世界で情報技術が急速に発展するなか、ビッグデータ時代を先導するデータ工学の研究者。西尾新総長は、学内外に広く意見を求め、合意形成を図りつつ、総長としての強力なリーダーシップのもとで確固たる大阪大学の基盤を築き、世界に誇れる人材を育成すると語る。

（※2015年7月8日情報科学研究科でインタビュー）

■総長就任について

――総長就任についてどう受け止められていますか。

私の総長の任期は、第3期中間目標期間とも重なり、大阪大学にとっての非常に重要な6年間を預かると考えています。また、今回の任期の最終年となる2021年は大阪大学創立90周年、大阪外国語大学創立100周年にあたります。そのため、いかに大阪大学を進化・発展させて次世代へバトンタッチするかが課題だと思っています。

――大学運営で大切にしたいことは。

対話と合意形成です。一人ひとりの教職員、学生は非常に高い潜在能力を持っています。皆さんが大阪大学のために頑張ろうという意志を持ってもらえれば、この大学は絶対強くなると確信しています。そのために一番大事なことは、きっちりと語りかけ、話を聴くということです。つまり一緒にやっていきましょうと共鳴することの重要性です。

大学運営は、トップダウンとボトムアップの両面がないとうまくいきません。そのあり方は企業経営とも違うところです。総長の強いリーダーシップは、教職員一人ひとりを大事にしながら合意形成を図っていくことと矛盾せず、それが実現してこそ発揮されるものです。

■人文学・社会科学と自然科学のクロス

――スローガンはありますか。

「知の協奏と共創」です。今後、人文学・社会科学は、日本の持続的なイノベーションを起こすうえでより重要になると思います。今までイノベーションというのは、自然科学の研究成果から起きると言われてきました。そして、人文学・社会科学の役割は、先端的な自然科学の学術の知を現在及び将来の人類の福祉に寄与する水路に導く方向舵としての役割を担ってきました。ところが、今後、社会が複雑で混沌とする時代においては、持続的なイノベーションは、人文・社会・自然の全ての領域において創出される多種多様な知に耕された社会的土壌を基盤にして初めて可能になると考えます。この事実に留意すれば、人文学・社会科学と自然科学が総体としてあいまって熟成し続けることの重要性は明らかです。その観点からも、大阪大学の多様な「知」が連携し合うこと（協奏）、また、そのような「知」を構成員、関係者の皆さまと共に創出していくこと（共創）が重要だと考えます。

■真髄を究める基礎研究でも産学連携を

――研究をするうえで財政基盤の確保はどのように。

今後は、基礎的な研究に関しても産学連携を積極的に進めます。産学連携というと、どうしても応用研究になりがちですが、基礎的な研究においても重要だと考えます。また、文部科学省も同様の方向性を打ち出しています。真髄を究める基礎研究を続けていけば自然と応用研究に結びつくという信念を持っていますので、財政基盤の確立の観点からもこのような方向性を重要視し、実現したいと考えています。

――産学連携で大切にすべきことは。

産学連携のプロセスに大学院生を巻き込んで人材育成を図ることです。大学の恒久的な使命は卓越した人材を育てることですから。

■「グローカル」な資質を持った人材の育成

――どんな学生を育てていきますか。

グローバルとローカルを合わせた「グローカル」という言葉があります。例えば、今日は日本の山あいの集落で住民に溶け込んで調査、研究をしているかと思えば、次の日はニューヨークの国際会議で学会発表するといった、地域に根差した視点を持ちつつ世界も視野に入れて活躍する学生、つまり、「地域に生き世界に伸びる」という大阪大学のモットーをまさしく実践するような学生の育成ですね。単にグローバルだけというのは、上滑りの感じがします。大事なのは、「教養」「国際性」「デザイン力」「コミュニケーション力」を兼ね備えた人材を育成することです。

――大学ランキングについては。

ランキングを全く無視することはできないと思います。ランキングありきで大阪大学の研究分野を左右するというのではなく、大事にしたいのは、大阪大学のこれまで取り組んできた優れた研究が結果としてランキングに結びつくようにすることです。むしろ大学が持つ総合的なパワーに関する情報を積極的に的確に発信し、国内外のいろいろな大学や機関に知ってもらい、正しく評価されることが重要だと思っています。

「教育の阪大」「研究の阪大」の特色をいかに出していくか。「阪大らしさ」を大切にし、「構成員と共にある阪大」にしたい。

■昔はスキー選手。今も登山を楽しむ

――ご趣味は。

小中学生の頃はスポーツ三昧で、以前、中学の同窓会に出席した折に、大学の教員をしていると言ったら、みんな驚いていました。てっきりスポーツ選手になると思っていたらしいです（笑）。春夏は野球、秋は陸上競技、そして冬はスキーという具合です。中学生の時は、岐阜県のスキー大会（スラローム）で優勝したこともありますよ。登山も好きで今でも時々登っています。やり始めたらとことんやるというスポーツスピリットで研究も取り組んできたのかもしれません。

■学生たちとも気軽に対話

――最後に学生へのメッセージをお願いします。

学生時代は、世間から見れば無駄なことをやっているように思われることでも一生懸命に打ち込める時です。もちろん勉学には励んでほしいですけれど、自分の好きなことに熱中して突き詰めてほしいですね。私は総長室にとどまるのではなく、キャンパスのあちらこちら、ふらっと学食などに出没して、学生たちといろいろな話をしてみようと思っています。これからの6年間、粉骨砕身の覚悟で全身全霊の力を込めて頑張ります。

■西尾章治郎（にしお しょうじろう）
1951年生まれ。75年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科博士後期課程修了（工学博士）。京都大学工学部助手、カナダ・ウォータールー大学客員研究助教授、大阪大学基礎工学部助教授、情報処理教育センター助教授を経て、92年同工学部教授。その後、大阪大学サイバーメディアセンター長（初代）、同大学院情報科学研究科教授（現在に至る）、同研究科長、大阪大学総長補佐、2007年～2011年同理事・副学長。13年同サイバーメディアセンター長。専門はデータ工学。

【政府関係委員】文部科学省科学官、同科学技術・学術審議会委員、同文化審議会臨時委員、同大学設置・学校法人審議会専門委員、日本学術会議会員（情報学委員長）、内閣府総合科学技術会議専門委員、日本学術振興会産学協力総合研究連絡会議委員、科学技術振興機構研究主監（PD）、日本ユネスコ国内委員会委員をはじめ多くの委員を歴任。

【受賞・表彰】紫綬褒章、文部科学大臣賞、電子情報通信学会業績賞・功績賞、情報処理学会功績賞、日本データベース学会功労賞、立石賞功績賞、船井情報科学振興賞をはじめ多数の賞を受賞。IEEEをはじめ日本工学会、情報処理学会、電子情報通信学会のフェローの称号を授与される。